母となる

福田英子

青空文庫

一　妊娠

是より先き妾の尚ほ郷地に滞在せし時、葉石との関係につき他より正式の申込あり、葉石よりも直接に旧情を温めたき旨申来るなど、心も心ならざるより、東京なる重井に柬して其承諾を受け、父母にも告げて再び上京の途に就きしは廿二年七月下旬なり。此頃より妾の容体尋常ならず、日を経るに従ひ胸悪く頻りに嘔吐を催しければ、扨はと心に悟る所あり、出京後重井に打明て、郷里なる両親に謀らんとせしに彼は許さず、暫らく秘して人に知らしむる勿れとの事に、妾は不快の念に堪へざりしかど、斯る不自由の身となりては、今更に詮方もなく、彼の言ふが儘に従ふに如かずと閑静なる処に寓居を構へ、下婢と書生の三人暮しにていよ〳〵世間婦人の常道を歩み始めんとの心構へなりしに、事実は之に反して、重井は最初妾に誓ひ、将た両親に誓ひしことをも忘れし如く、妾を遇すること彼の口にするだも忌はしき外妾同様の姿なるは何事ぞや。如何なる事情あるかは知らざれども、妾を斯る悲境に沈ましめ、殊に胎児にまで世の謗りを受しむるを慮らずとは、是れをしも親の情といふべきかと、会合の都度切に言聞えるに、彼も流石に憂慮の体にて、今暫らく発表を見合し呉れよ、今郷里の両親に御身懐胎の事を報ぜんには、両親とても直ちに結婚発表を迫らるべし、発表は容易なれども、自分の位地として、又御身の位地として相当の準備なくては叶はず、第一病婦の始末だに、尚付きがたき今日の場合、如何ともせんやうなきを察し給へ。目下弁護事務にて頗る有望の事件

を担当し居り、此事件にして成就せば、数万の報酬を得んこと容易なれば、其上にて総て花々しく処断すべし、何卒暫しの苦悶を忍びて、胎児を大切に注意し呉れよと他事もなき頼みなり。素より彼を信ずればこそ此百年の生命をも任したるなれ、斯くまで事を分けられて、尚ほしも※は偽りならん、一時遁れの間に合せならんなど、疑ふべき妾にはあらず、他日両親の憤りを受くるとも、言ひ解く術のなからんやと、事に托して叔母なる人の上京を乞ひ、事情を打明けて一身の始末を托し、只管胎児の健全を祈り、自から堅く外出を戒めし程に、景山は今何処に居るぞ、一時を驚動せし彼の女の所在こそ聞まほしけれなど、新聞紙上にさへ謳はるゝに至りぬ。

二　分娩、奇夢

その間の苦悶そも幾何なりしぞや。面白からぬ月日を重ねて翌廿三年三月上旬一男子を挙ぐ。名はいはざるべし、悔ある堕落の化身を母として、明らさまに世の耳目を惹かせんは、子の行末の為め、決して好き事にはあらざるべきを思うてなり。唯だその命名につきて一場の奇談あり、迷信の謗り免かれずとも、事実なれば記しおくべし。其子の身に宿りしより常に殺気を帯べる夢のみ多く、或時は深山に迷ひ込みて数千の狼に囲まれ、一生懸命の勇を鼓して、其首領なる老狼を引倒し、上顎と下顎に手をかけて、口より身体までを両断せしに、他の狼児は狼狽して悉く遁失せ、又或時は幼時嘗て講読したりし、十八史略中の事実、即ち『禹江を渡る時、蛟龍船を追ふ、舟中の人皆慴る、禹天を仰いで、嘆じて曰く、我命を天に享く、力を

尽して、万民を労す、生は寄なり、死は帰なりと、龍を見る事、蜿※の如く、眼色変ぜず、龍首を俯し尾を垂れて、遁る。〟と云へる有様の歴々と目前に現はれ、しかも妾は禹の位置に立ちて、禹の言葉を口に誦し、龍をして遂に辟易せしめぬ。然るに分娩の際は非常なる難産にして苦悶二昼夜に亙り、医師の手術によらずば、分娩覚束なしなど人々立騒げる折しも、恰も陣痛起りて、それと同時に大雨篠を乱しかけ、鳴神おどろ〳〵しく、はためき渡りたる其刹那に、児の初声は挙りて、左しも盆を覆さんばかりの大雨も忽ちにして霽れ上りぬ。後にて書生の語る所によれば、其日雨の降りしきれる時、世に云ふ龍まきなるものありて、その蛇の如き細き長き物の天上するを見たりきといふ。妾は児の重ね〳〵〟〵龍に縁あるを奇として、それに因める名をば命けつ、生ひ先きの幸多かれと祷れるなりき。

三　児の入籍

児を分娩すると同時に、又も一の苦悶は出で来りぬ。そは重井と公然の夫婦ならねば、児の籍をば如何にせんとの事なりき。幸なるかな、妾の姓娠中屡※診察を頼みし医師は重井と同郷の人にして、日頃重井の名声を敬慕し、彼と交誼を結ばん事を望み居たれば、此人によりて双方の秘密を保たんとて、親戚の者より同医に謀る所ありしに、義侠に富める人なりければ直ちに承諾し、己れ未だ一子だになきを幸ひ、嫡男として役所に届出でられぬ。斯て両人とも辛ふじて世の耳目を免かれ、死よりもつらしと思へる難関を打越えて、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、郷里より母上危篤の電報は来りぬ。

四　愛着

分娩後未だ三十日とは過ぎざりし程なりければ、遠路の旅行危険なりと医師は切に忠告したり。左れど今回の分娩は両親に報じやらざりし事なれば今更にそれぞとも言ひ分けがたく、殊には母上の病気とあるに、争で余所にやは見過すべき、仮し途中にて死なば死ね、思ひ止まるべくもあらずとて、人々の諫むるを聞かず、叔母と乳母とに小児を托して引かゝ後髪を切払ひ、書生と下女とに送られて新橋に至り、発車を待つ間にも児は如何になし居るやらんと、心は千々に砕けて、血を吐く思ひとは是なるべし。実に人生の悲しみは頑是なき愛児を手離すより悲しきはなきものを、それをすら強ひて堪へねばならぬとは、是れも偏に秘密を契りし罪悪の罰ならんと、吾れと心を取り直して、唯一人心細き旅路に上りけるに、車中片岡直温氏が嫂某女と同行せられしに逢ひ、同女が嬰児を懐に抱きて愛撫一方ならざる有様を目撃するにつけても、他人の手に愛児を残す母親の浅ましさ、愛児の不憫さ、探りなれたる母の乳房に離れて、俄かに牛乳を与へらるゝさへあるに、哺乳器の哺みがたくて、今頃は如何に泣き悲しみてやあらん、汝が恋ふる乳房はこゝに在るものを、そも一秒時毎に、汝と遠ざかりまさるなりなど、吾れながら日頃の雄々しき心は失せて、児を産みてよりは、世の常の婦人よりも一層女々しうなりしぞかし。左しも気遣ひたりし身体には障りもなくて、神戸直行と聞きたる汽車の、俄かに静岡に停車する事となりしかば、其夜は片岡氏の家族と共に、停車場近き旅宿に投じぬ。宿泊帳には故意と偽名を書したれば、片岡氏も妾をば景山英とは気付かざりしならん。

五　一大事

翌日岡山に到着して、なつかしき母上を見舞ひしに、危篤なりし病気の、やう〳〵怠りたりと聞くぞ嬉しき。久し振りの妾が帰郷を聞て、親戚ども打寄りしが、母上よりは却て妾の顔色の常ならぬに驚きて、何様尋常にてはあらぬらし、医師を迎へよと口々に勧め呉れぬ。さては一大事、医師の診察によりて、分娩の事発覚せば、妾は兎も角、折角怠りたる母上の病気の、又はそれが為めに募り行きて、悔ゆとも及ばざる事ともならん。死するも診察は受けじとて、堅く心に決しければ、人々には少しも気分に障りなき旨を答へ、胸の苦痛を忍び〳〵て、只管母上の全快を祈る程に、追々薄紙を剥ぐが如くに癒え行きて、はては、床の上に起き上られ、妾の月琴と兄上の八雲琴に和して、健やかに今様を歌ひ出で給ふ。

春のなかばに病み臥して、花の盛りもしら雲の、消ゆるに近かき老の身を、うからやからのあつまりて、日々にみとりし甲斐ありて、病はいつか怠りぬ、実に子宝の尊きは、医薬の効にも優るらん、

滞在一週間ばかりにて、母上の病気全く癒えければ、児を見たき心の矢竹にはやり来て、今は思ひ止るべくもあらねば、吾れにもあらず、能き程の口実を設けて帰京の旨を告げ、且つ妾も思ふ仔細あれば、遠からず父上母上を迎へ取り、膝下に奉仕することとなすべきなど語り聞えて東京に帰り、先づ愛児の健かなる顔を見て、始めて十数日来の憂さを霽しぬ。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆42　母」作品社
　1986（昭和61）年4月25日第1刷発行
　1988（昭和63）年1月20日第5刷発行
底本の親本：「妾の半生涯」岩波文庫、岩波書店
　1958（昭和33）年4月
入力：もりみつじゅんじ
校正：菅野朋子
2000年6月1日公開
2005年6月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母となる

福田英子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/